

日蓮聖人の積尊観

松 代 邦 義

はじめに

日蓮聖人の活動された鎌倉時代、民衆の殆どが真言や、念仏、禅等に惑わされていた。人々は仏教徒と称しながら、仏教の開祖である釈尊をないがしろにしていたのである。聖人はこのことを、『法華取要抄』の中に、

或人師下ニ^{シテ}積尊^ヲ仰^ニ崇大^ニ日如来^ニ 或人師世尊^ハ無縁^{ナリ}
阿弥陀^ハ有縁^也。或人師云^ク 小乗^ノ積尊^ト。或華嚴經^ノ積尊^ト。
或法華經迹門^ノ積尊^ト。(一)

と記されている。すなわち、或る師は積尊を下して大日如来と仰ぎ、或る師は積尊は我々とは縁がなく、阿弥陀仏と我々は縁があるとし、或る師は小乗の積尊を崇拜し、或る師は華嚴經の積尊を崇め、或る師は法華經迹門の積尊を崇拜しているとされるのである。

つづけて、『法華取要抄』には、

二月十五日^ハ積尊御入滅^日乃至十二月十五日^モ三界慈父^ノ御遠忌^也。誑^{サレテ}善導[・]法然[・]永観等^ノ提婆達多^ニ定^メ阿弥陀^ハ日^ト畢^ス。四月八日^ハ世尊御誕生^日也。取^リ薬師^ハ日^ト畢^ス。我慈父^ノ忌日^ヲ替^ハ他^ニ他^ニ孝養^者歟^{如何}。寿量^品云^ク 我亦為世父為治狂子故等^{云云}。(二)

と、当時、積尊の御誕生・御入滅の聖日を他仏の聖日と定めて仏事を営まれていたという現実のあったことを語られるのである。

このように、人々が積尊を忘失している光景を見て嘆かれ、立ち上がられたのが日蓮聖人である。

聖人は『法華取要抄』で、

教主積尊^ハ既^ニ五百塵点劫^{ヨリ}已来^ニ妙覚果満^ニ仏^{ナリ}。大日如来[・]阿弥陀如来[・]薬師如来等^ノ尽十方諸仏^ハ我等^カ本師^ト教主^ト積尊^ノ所從^等也。(三)

と積尊と諸仏との関係を明示され、さらに、『法華取要

抄』で、

此土我等衆生五百塵点劫已來教主釈尊愛子也。(4)

と語られ、此土の娑婆世界に住む我々衆生は五百塵点劫という久遠の昔より釈尊の愛子であり、法華経本門如來壽量品に説かれる釈尊を一切衆生は崇むべきであると獅子吼されるのである。

そして、聖人は求道の結果、法華経こそが釈尊の説かれた真実の教えであるとされ、法華経を命懸けで弘めて行かれる。

それでは日蓮聖人が命を懸けてまでも弘めようとされた法華経に説かれる釈尊とは一体どのような方なのか、法華経や聖人遺文に問いつつ述べて行きたい。

一、三徳具備の釈尊

まずはじめに、従来研究されてきた「日蓮聖人の釈尊観」を一瞥してみると、主・師・親三徳具備の釈尊の面からなされていることが確認できる。このことは、渡辺宝陽先生が、その論文「日蓮聖人の釈尊観」の中で、「釈尊は此土有縁の仏陀であり、主師親三徳を具備していること、娑婆国土の主であることが日蓮聖人の教主釈尊間の中枢をなすと思われる」と述べられていること

からもわかる。ここでは、従来の先生方の研究をふまえながら、「日蓮聖人の釈尊観」の主師親三徳具備の釈尊の面をとりあげ、それを聖人の遺文に確認して行きたい。周知の通り、釈尊は、『法華経・譬喩品第三』の中で舍利弗に、

(イ) 今此の三界は 皆是れ我が有なり

(ロ) 其の中の衆生は 悉く是れ我が子なり

(ハ) 而も今此の処は 諸の患難多し 唯我一人のみ能く救護を為す(6)

と開陳される。

聖人は、この経文について、(イ)は主徳、即ち衆生を守護する徳のことを、(ロ)は親徳、即ち衆生を慈愛する徳のことを、(ハ)は師徳、即ち衆生を導き教化する徳のことを、釈尊自身が述べられていると見られるのである。そして、聖人は、この三徳を具備していることが衆生救済の仏の条件であるとされ、これを具備しているのは、娑婆世界においては釈尊一仏であるとされるのである。このことは、『南條兵衛七郎殿御書』に、

法華経の第二云、今此三界皆是我有。其中衆生悉是吾子。而今此処多諸患難。唯我一人能為救護。雖復教而不信受等。此文の心は釈迦

如来は此等衆生には親也、師也、主也。我等衆生のためには阿弥陀仏・薬師仏等は主にてはましませども、親と師とはましまさず。ひとり三徳をかねて思ふかき仏は釈迦一仏にかぎりたてまつる。親も親にこそよれ、釈尊ほどの親。師も師にこそよれ、主も主にこそよれ、釈尊ほどの師主はありがたくこそはべれ。この親と師と主との仰をそむかんもの、天神地祇にすてられたてまつらざらんや。不孝第一の者也。(7)

と、『法華経・譬喩品』の文を挙げ、諸仏はその仏が活動される国土においてそれぞれ三徳を具備しているが、しかし娑婆世界においては教主釈尊のみが我々衆生にとつて、主であり、師であり、親であつて、阿弥陀仏・薬師仏等は、娑婆世界にあつては、主ではあつても師や親を欠くとされる、と述べられていることから明らかである。またこれらことは、『一代五時鷄図』(8)等の記述によつても明白である。

また聖人は、『八宗違目鈔』に、

法華経第二云、今此三界皆是我有、ナリ主國王其中衆生悉是吾子、ナリ親父而今此処多諸患難、世尊也唯我一人、ノミ導師能為教護、ス。寿量品云、我亦為世父、文。(9)

と記述され、法華経第二の卷・譬喩品の文を挙げて、主・師・親についての記述を施し、更に、寿量品の「我亦為世父。」と述べられていることや、先に挙げた『南條兵衛七郎殿御書』の記述から、聖人はこの三徳の中でも特に親徳を強調され、我々衆生は五百慶点劫の過去遠々劫の昔に釈尊によつて不種・結縁されている。そこに父子の関係があり、その下種によつて我々衆生は救われるとされる。それゆえに、他土の仏である阿弥陀仏・薬師仏々とはこの父子の義が成立しないことを明らかにされるのである。ここに釈尊と娑婆世界の衆生との絶對的に切り離すことの出来ない面が看取できる。

このように、聖人の遺文には、釈尊の仏格を、主師親三徳の面から記述されている箇所が多いことが確認できる。

さらに、この三徳について述べられている遺文を見てみると、『開目抄』には、

夫一切衆生の尊敬すべき者三あり。所謂主・師・親これなり。(10)

とあつて、我々一切衆生はこの主師親の三徳を尊敬し、帰敬しなければならぬという。そして、この三徳を具備していることが衆生救済の仏の条件であると見なされ

ている。つづけて『開目抄』で、

三には大覺世尊。此一切衆生の大導師・大眼目・大橋梁・大船師・大福田等なり。(11)

と述べられ、三徳を具備されているのは釈尊一仏であるとされるのである。この他にも、聖人遺文には、『法門可被申様之事』(12)、『祈禱鈔』(13)、『一谷入道御書』(14)、『下山御消息』(15)、『一大五時図』(16)、『一大五時鷄図』(17)、等に見られるように、主・師・親三徳具備の釈尊についての記述は多い。

二、法華經の中に見られる釈尊の尊称

つぎに、日蓮聖人の釈尊観を知る上で、法華經の中の釈尊がどのような言葉で尊称され、表現されているかが問題となつてこよう。

法華經には、釈尊がつぎのように、さまざまな言葉で尊称されている。

仏 世尊 仏世尊

導師 聖主師子

如来の十号〔如来・応供・正遍知・

明行足・善逝・世間解・無上士・

調御丈夫・天人師・仏世事〕

如来 釈師子 世雄

慧日大聖尊 両足尊 法王無上尊

無上両足尊 釈迦文 第一之導師

諸法王 衆聖中尊世間之父

法王 衆聖之王 一切智者

一切見者 知道者 開道者

說道者 無上尊 大雄猛世尊

諸釈之法王 無両慧世尊 無量智仏

世尊慧灯明 清浄光明身 釈迦牟尼世尊

釈迦牟尼仏 慈父 大師

於三界中為大法王 無量徳世尊

諸釈中之王(18)

たとえば、この慧日大聖尊とは、智慧の明了なること太陽の如き聖者の意味であり、法王無上尊とは王者の中の王者のことであり、無上両足尊とは、両足で歩くもの、つまり人間を指し、その人間の中で最も尊い人をいう。又、大雄猛世尊とは、世の尊敬を受くべき偉大な勇士の意味である。

このように法華經において、釈尊は智慧明了、王者、猛し者等の尊称で偉大なる存在として崇められていることがわかる。そして、その底には、衆生をいつくしみ、

あわれむ心のあることが、法華経の中に「大慈悲」や「慈悲」等の語句が多く見られることから明らかである。

「大慈悲」については、法華経の中に、八ヶ所記述が見られる。

即ち、『法華経・嘱累品第二十二』には、

如来は大慈悲あつて諸の慳慥なく、亦畏る、所なくして、能く衆生に仏の智慧・如来の知慧・自然の知慧を与う。(19)

と釈尊自らが語られている他、『法華経・法師品第十』には、

是の善男子・善女子は、如来の室に入り如来の衣を著如来の座に坐して、爾して乃し四衆の為に広く斯の経を説くべし。如来の室とは一切衆生の中の大慈悲心是れなり。如来の衣とは柔和忍辱の心是れなり。

如来の座とは一切法空是れなり。(20)

と述べられ、法を弘める上での心がまえとして、慈悲心を起こすように勧めている。他にも法華七喩の各々の喩えや、「毎自作是念」等の経文の意味を探るならば、法華経全体が大慈悲の説法であり、釈尊は「大慈悲の父」と言える。

以上述べたように法華経の中には多くの釈尊の尊称の表記が見られるが、中でも「慈悲」という表現が多く見られることが理解できた。それでは、日蓮聖人はこの「慈悲」を、どのように見られていたのであろう。

三、日蓮聖人の大慈悲継承

まず聖人遺文の「慈悲」という表現を問うて行く前に、聖人以前の人達の「慈悲」についての考え方を見て行く。

龍樹は、その著『大智度論』に

大慈とは一切の衆生に樂を与え、大悲とは一切の衆生のために苦を抜く。大慈は喜樂の因縁を衆生に与え、大悲は離苦の因縁を衆生に与う。(21)

と述べ、大慈を与樂の義とし、大悲を抜苦の義とされている。

天台大師智顛は、『法界次第初門』の中で、

能く他のものに樂の心を与えること、これを名づけて慈となす。(中略)能く他のものより苦の心を抜くこと、これを名づけて悲となす。(22)

と記され、慈悲の慈の字は与樂の義とし、父の愛にたとえ、悲の字は抜苦の義で、母の愛にたとえられている。

さて、日蓮聖人は「慈悲」についてどのようなように考えられ、釈尊の「大慈悲」をどう受けとめられたのであろうか。

聖人は『千日尼御前御返事』の中で、

父母の恩の中に慈父をば天に譬へ、悲母をば大地に

譬へたり。いづれもわけがたし。(23)

と述べられ、慈父、悲母の表現を出されている。

又、『観心本尊抄』の中では、

天晴^{スレハ}地明^{ナリ}。識^ル法華^ヲ者^ハ可^レ得^ニ世法^ヲ。不^ル識^ヲ一

念^ニ三千^ノ者^ニ、仏起^ニ大慈悲^ヲ。五字^ノ内裏^ニ此珠^ヲ

令^シ末代^ニ幼稚^ノ頸^ニ。(24)

と書き示され、釈尊が衆生に対して大慈悲を垂れていることを述べられる。

そして、『開目抄』には、

されば日蓮が法華経の智解は天台伝教には千万が一

分も及事なけれども、難を忍び慈悲すぐれたる事を

それをもいだしぬべし。(25)

と記述され、聖人は忍難慈勝については天台・伝教にも勝れていると述べられる。

さらに『報恩抄』では、

日蓮が慈悲広大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外

未来までもながるべし。日本国の一切衆生の盲目をひらける功德あり。無間地獄の道をふさぎぬ。(26)と述べられ、釈尊から受けた慈悲を受けとめるだけでなく、仏使として人々に実践していこうとする決意が見られる。

そして『諫暁ハ幡抄』には、

今日蓮は去^{スル}、建長五念^発、四月二十八日より、今弘安

三年^{太歳}十一月にいたるまで二十八年が間、又他事

なし。只妙法華経の七字五字を日本国の一切衆生の

口に入^ルとはげむ計也。此即母の赤子の口に乳を入^ル

とはげむ慈悲也。(27)

と語られ、聖人自身が今迄、正法である法華経を弘められてきたのは慈悲の実践に他ならないことを述べられるのである。

さらに『王舎城事』には、

かう申せば国主等は此法師のをど(威)すと思へるか。あへてにくみては申さず。大慈大悲の力、無間

地獄の大苦を今生にけ(消)さしめんとなり。(28)

と記され、日蓮聖人は折伏を嘆き痛みをともなった慈悲であるとされ、法華経に依らない人々を慈悲の実践として、折伏されて行くのである。さらに『唱法華題目鈔』

には、

天台大師会して云^ク 如来以^ハ悲^ヲ故^ニ發^ス遣^シ 喜根以^ハ慈^ヲ故^ニ

強^ク説^ス。文の心は、仏は悲の故に、後にたのしみを

は闕て、当時法華經を謗じて地獄にちて苦にあう

べきを悲み給て、座をたしめ給き。譬ば母の子に

病あると知れども、当時の苦を悲て左右なく灸を

加へざるが如し。喜根菩薩は慈の故に、当時の苦を

ばかへりみず、後の樂を思て、強て令^ム説^ス聞^カ之^ヲ。

譬ば父は慈の故に子に病あるを見て、当時の苦をか

へりみず、後を思ふ故に灸を加るが如し。(29)

と述べられ、慈を父の愛に、悲を母の愛とされ、子供が

病氣になった時、灸をすれば治るといふことが解つて

いても、母は子に苦痛を与えるのをおそれて灸を加えよ

うとしない。しかし父は、たとえ一時的な苦痛を与えて

も、病を治すために灸を加えると記され、慈を折伏とみ

なされるのである。

そして『法門可被申様之事』に、

世尊は我等が慈父として未顕真実ぞと定させ給御心

は、(30)

と、聖人が釈尊を慈父とされていることなどから合わせ
て考えれば、日蓮聖人は慈のほうをより高きものと解釈

されていたことが窺えるのである。

むすびにかえて

以上、『日蓮聖人の釈尊観』について考察してきたが、

聖人が当時、釈尊をないがしろにして阿弥陀・大日・薬

師等の他仏を崇拜した人々を厳しく批判され、それらの

人々に真実の教主釈尊を崇めるよう、不惜身命の努力を

重ねられていたことが確認できた。そして、その「折

伏」の実践は、法華經に説かれる釈尊の徳目のうちの「一

つ「慈悲」の実践にほかならないことが明らかになった。

今後の課題としては、聖人の尊崇の対象は、あくまで

法華經に説かれる釈尊であるため、今回は法華經の中の

釈尊の尊称についてあげたが、今後は、更に詳しく研究

をして行く必要があると思う。

又、当時、釈尊を崇拜していた人々に、明恵等があげ

られるが、明恵の釈尊観を窺いながら、「日蓮聖人の釈

尊観」を更に詳しく追及して行こうと思う。

註

(1) 『法華取要抄』八二二頁

(2) 『同右』八一三頁

- (3) 『同右』 八二二頁
- (4) 『同右』 八二二頁
- (5) 茂田井先生古稀記念『日蓮教学の諸問題』所収二二三頁
- (6) 『真訓両読妙法蓮華経並開結』(以下『開結』と略記す)
一六三頁
- (7) 『南條兵衛七郎殿御書』三二〇—一頁
- (8) 『一代五時鷄図』二二三—八—二三四一頁
- (9) 『八宗違目鈔』五二五—六頁
- (10) 『開目抄』五三五頁
- (11) 『同右』五三八頁
- (12) 『法門可被申様之事』四四五頁
- (13) 『祈禱鈔』六七六—七頁
- (14) 『一谷入道御書』九九二頁
- (15) 『下山御消息』一三四〇頁
- (16) 『一代五時図』一三三八—二三四一頁
- (17) 『一代五時鷄図』二三五—八—九頁
- (18) ① () 内は『開結』「上段の真読」の頁数による。
 仏(五五頁)、世尊(五九頁)、仏世尊(六一頁)、導師(六三頁)、聖主師子(六三頁)、如來の十号(如來・応供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏世尊)(七七頁)、如來(七七頁)、釈師子(八三頁)、世雄(八八頁)、慧日大聖尊(九三頁)、兩足尊(九三頁)、法王無上尊(九五頁)、無上兩足尊(九六頁)、釈迦文(一一八頁)、第一之導師(一一八頁)、諸法の王(一二二頁)、

- 衆聖中尊世間之父(一六二頁)、法王(一六六頁)、衆聖之王(一七〇頁)、一切知者・一切見者・知道者・開道者・說道者(二〇五頁)、無上尊(二二二頁)、大雄猛世尊(二一九頁)、諸釈之法王(二一九頁)、無量慧世尊(二六七頁)、無量智仏(二九二頁)、世尊慧灯明(三〇四頁)、清淨光明身(三一九頁)、釈迦牟尼世尊(三二三頁)、釈迦牟尼仏(三二七頁)、慈父(三七九頁)、大師(三八一頁)、於三界中為大法王(三八五頁)、無量德世尊(四〇三頁)、諸釈中之王(四四二頁)
- (19) 『開結』五〇八頁
- (20) 『開結』三一七頁
- (21) 『大正新修大藏経』二五卷二五六頁中
- (22) 『同右』四六卷六七二頁中
- (23) 『千日尼御前御返事』一五四二頁
- (24) 『観心本尊抄』七二〇頁
- (25) 『開目抄』五五九頁
- (26) 『報恩抄』一二四八—九頁
- (27) 『諫曉八幡抄』一八四四頁
- (28) 『王舎城事』九一七頁
- (29) 『唱法華題目鈔』二〇五—六頁
- (30) 『法門可被申様之事』四四四頁